北海道南部円筒土器文化圏の生業・環境を明らかにするための基礎的研究
－函館市サイベ沢遺跡を中心に－

名古屋大学博物館　新美倫子

はじめに

縄文時代前～中期の円筒土器文化は北海道南部から東北北部にかけての広い地域を席巻したが、この文化圏の生業や環境について、北海道南部では未だ不明な部分が多い。当時の生業・環境を解明するのに有力な情報源として出土動物遺体があるが、当地域には内浦湾奥部を除いてそれらの出土する貝塚が少ない上に、かつては存在した貝塚の多くも早くから進んだ開発のために残っていないからである。このような状況下で、円筒土器文化期の貝層の残存と動物遺体の出土が期待される遺跡が、函館市サイベ沢遺跡である。

サイベ沢遺跡は台地上に広がる大規模な集落址で、台地の北端部分にはかつて貝層の存在が確認されていた。この貝層を現在の技術で調査・分析すれば、多くの情報が得られ、当該期の生業や環境に言及できるはずである。しかし、現状では貝層の分布範囲や残存状況は、まったくわからなくなってしまっている。そこで本研究では、サイベ沢遺跡の中でも対象をその貝層部分に絞って、生業・環境復元のための今後の本格的な調査と遺跡の保存・活用に向けたその実態把握を目的とした。

調査は 2015 年 11 月 16 日から 11 月 20 日の 5 日間で実施し、調査参加者は新美倫子（名古屋大学博物館）、村松裕南・廣瀬允人（名古屋大学大学院生）、林麦人（愛知学院大学大学院生）、南部淳太・成瀬陽介（愛知学院大学学生）の 6 名である。調査を行うにあたって、滝花勝男氏・桜井貢氏・北海道渡島総合振興局函館建設管理部事業室事業課には大変お世話になった。また、調査期間を通して函館市教育委員会のみなさまには全面的にご協力いただいた。厚く感謝いたします。

調査の方法

a. かつて確認された貝層のおおよその位置の推定

所在のわからなくなってしまった貝層を探し出すには、貝層が過去に確認された際の位置情報が必要である。遺跡北端部分の貝層はこれまでにも何度か発

図 1　サイベ沢遺跡の位置

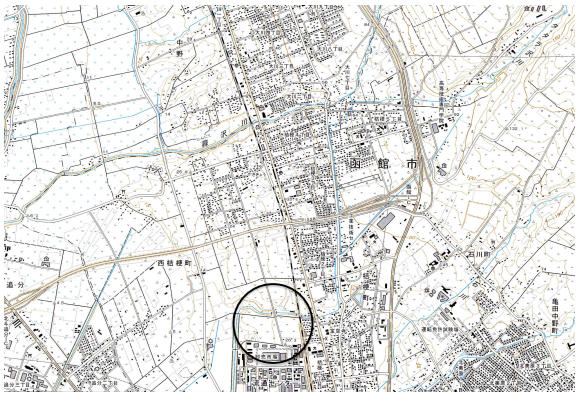

図 2　サイベ沢遺跡の立地

掘調査が行われており、1949 年の市立函館博物館による調査結果は発掘報告として刊行されている（児玉他 1958）。この調査では「第 1 地点」と「第 2 地点」においてそれぞれ貝層が発掘された。しかし、発掘報告書にはこれら両地点について、互いの位置関係を示す測量図は掲載されているものの（図 3）、台地上での両地点の位置は記録されておらず、両地点に存在した貝層の位置も不明である。

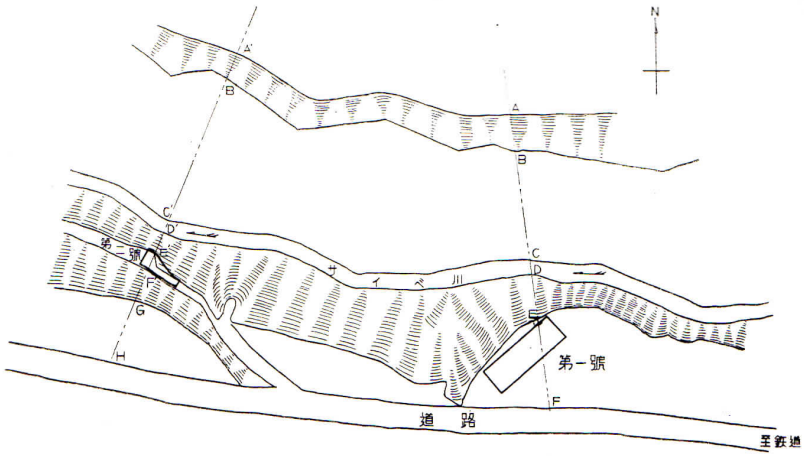

図 3　1949 年調査の第 1 地点と第 2 地点（児玉他 1958）

そこで、報告書の「西桔梗台地を縦断する**鉄道線路から西方約 300 メートル**のサイベ沢に面した崖の中腹に、厚さ 30 センチほどの貝層が・・これを**第 1 地点（第 1 号貝塚）**と名づけた。**更にこれより西へ約 65 メートル**の箇所に、・・・貝層が 3 層となって露出している。これを**第 2 地点（第 2 号貝塚）**と名づけた。」との記載をもとに、現在の台地上で JR 函館本線からの距離を測定し、第 1 地点・

第 2 地点のおおよその位置を割り出した（図 4）。

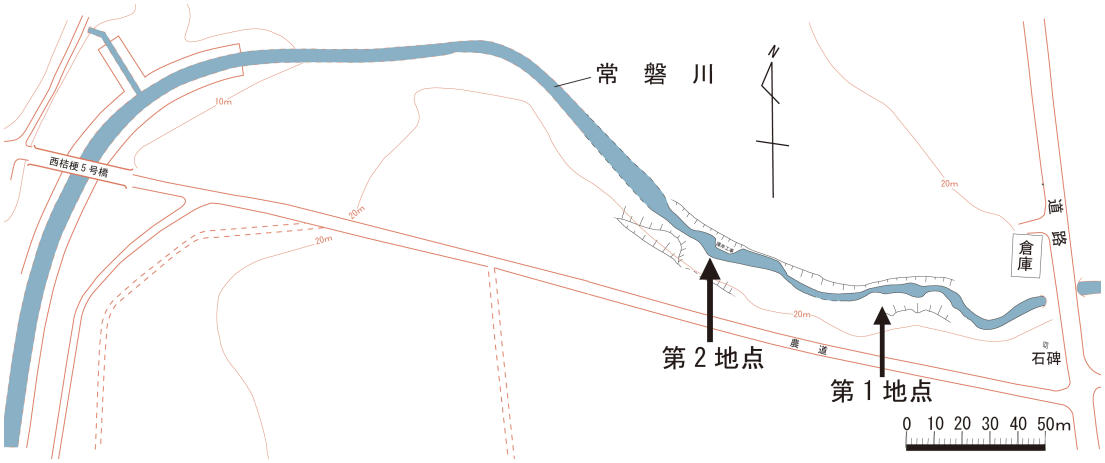

図 4　第 1 地点・第 2 地点のおおよその位置

b.　貝片・土器・石器の採集

さらに貝層の所在地点を絞り込み特定するためには、貝層に由来する貝片の発見・採集が重要な手がかりとなる。事前に遺跡の予備踏査を行ったところ、現在では 1949 年調査時と比較して台地北縁部の崩落がかなり進んでおり、それに伴って貝層も崩落していることが予想された。この崩落土は台地の北縁に沿って流れる常磐川（旧サイベ沢）に落下している。そこで、貝片を発見するために台地崩落面（崖面）と常磐川において下記を実施することとした。これらの作業は上述の第 1 地点・第 2 地点と思われるあたりを中心に行った。また、貝片採集と同時に土器・石器等も採集した（写真 1）。

写真 1 崩落面と常磐川の調査

○ 台地崩落面（崖面）の観察：
崩落面に貝層の一部が露出していないか、あるいは貝層存在の指標となる貝片が散布していないかを調べる。

○ 常磐川中崩落土の調査：
川底の崩落土をさらい、貝層由来の貝片が含まれていないか調べる。この際には、崩落土中の貝片は流されて下流に移動している場合も多いことに留意する。

c. 各地点での貝層残存状況の確認

b. の結果から貝層が分布すると思われる各地点でボーリングを行うことにより、それぞれの地点での貝層の有無や残存状況などを確認した。

調査結果

貝層所在地点の特定

台地の崩落面を草刈り・清掃後に観察した結果、貝片の散布が見られたのはA 地点と B 地点の 2 ヶ所（網かけ部分）であり、貝片・土器・石器等の資料を採集できたのは地点①～⑫の 12 ヶ所である（図 5）。

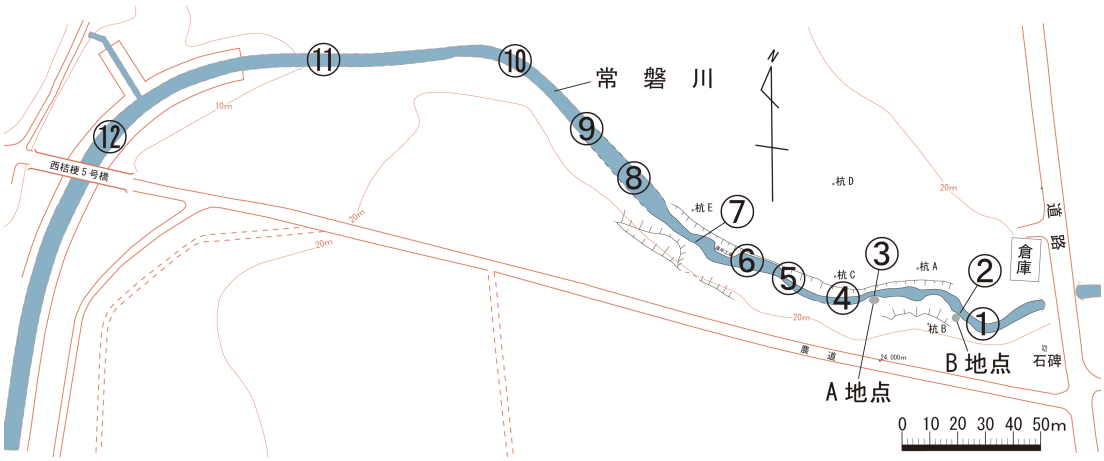

図 5　貝片の散布地点と貝片等の遺物採集地点

A 地点では崩落面の下部に 1.5m 四方程度の広さで細かな貝片の散布が見られた（写真 2）。B 地点では崩落面の中腹から下部まで幅 2m ほどの広さで貝片やアサリ・ハマグリ・シオフキの貝殻の散布が見られた（写真 3）。

地点①・③～⑤・⑦では崩落面と川底の両方で遺物が採集され、②では崩落面のみで、⑥・⑧～⑫では川底のみで遺物が採集された。これら 12 地点のうち、②・④（川底）・⑤（川底）・⑦（川底）・⑩～⑫ではアサリ・ハマグリ・シオフキの貝殻が採集された。①・③・⑥・⑧・⑨では貝は見られず、土器・石器のみが採集された。地点①～⑫で採集された土器・石器を写真 4 に示した。

第 1 地点に関しては、A 地点の貝片散布状況から見て貝層は A 地点の上方に

写真２　A 地点貝片散布範囲

写真３　B 地点貝片散布範囲

存在する(した)と考えられる。また、貝片・貝殻が多量に見られた B 地点の上方には、崩落面に貝層の一部が露出しているのが発見された(写真 5・6)。この貝層はこれまで記録されていないものであり、新たに第 3 地点とよぶこととする。第 2 地点においては貝片の散布は見られなかったが、昭和初期に作られた「水田地帯へ通ずる道路」（児玉他 1958）の跡と思われる地形の一部を崩落面に確認できた。この地形と 1949 年調査時の記録をあわせて検討した結果、貝層は⑦の上方あたりに存在する(した)であろうと推測された。しかし、地表面で貝片がまったく発見されなかったことから、貝層が残存している可能性は低いと予想された。

写真５　第 3 地点の貝層

写真６　第 3 地点貝層の位置

貝層の残存状況について

第 1 地点では 1-1～1-4 の 4 ヶ所、第 2 地点では 2-1～2-5 の 5 ヶ所において、地表下 2m 程度の深さまでボーリングを実施し、その結果を図 6 に示した。図 6 では貝片が検出された地点を●、検出されなかった地点を○で示した。また、第 1・第 2・第 3 地点の断面図（地表面のみ）を図 7～図 10 に示した。

＜第 1 地点＞

1-1(標高 15.7m)：地表下 25～50cm に少量の貝片が混じる混貝土層が検出された。

1-2(標高 17.46m)：地表下 90～110cm に少量の貝片が混じる混貝土層が検出された。

1-3(標高 18.28m)：貝片の検出なし。

1-4(標高 18.99m)：地表下 200cm あたりに少量の貝片が混じる混貝土層が検出された。

貝片が検出された 1-1・1-2・1-4 においても少量の貝片の混じる混貝土層が検出されたのみであり、純貝層や混土貝層は残存していない可能性が高いと思われる。

＜第 2 地点＞

2-1(標高 15.11m)：地表下 50cm あたりにごくわずかに貝片が混じる混貝土層が検出された。

2-2(標高 15.07m)：地表下 40cm あたりにごくわずかに貝片が混じる混貝土層が検出された。

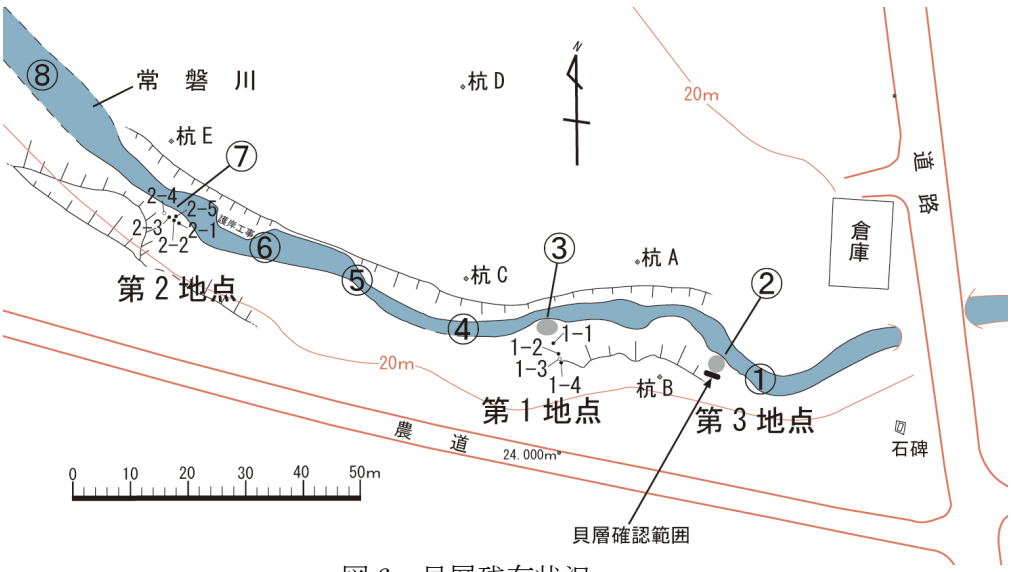

図 6　貝層残存状況

2-3(標高 15.15m)：地表下 40～75cm にごくわずかに貝片が混じる混貝土層が検出された。

2-4(標高 15.05m)：貝片の検出なし。

2-5(標高 14.66m)：地表下 100～125cm にごくわずかに貝片が混じる混貝土層が検出された。

貝片が検出された 2-1・2-2・2-3・2-5 においてもごくわずかに貝片の混じる混貝土層が検出されたのみであり、純貝層や混土貝層は残存していない可能性が高いと思われる。

＜第 3 地点＞

崩落面の上部、標高 20m あたりに貝層の一部が露出しており、厚さ数 cm～10cm 程度の混土貝層と土層が互層になっている様子が観察できたが、貝層を覆うように位置する樹木の根に阻まれて、台地上平坦面から貝層そのものへのボーリングは不可能であった。根の周辺部でボーリングを行ったところ貝層は検出されなかったことから、貝層の分布範囲は比較的小さく、東西方向に 3m 程度以内であろうと思われる。南北方向の貝層の広がりは不明である。貝層のすぐ下に落下していた土器片には縄文前期の資料と縄文中期の資料が混在しており、貝層の時期が前期なのか中期なのかは現段階では確定できない。

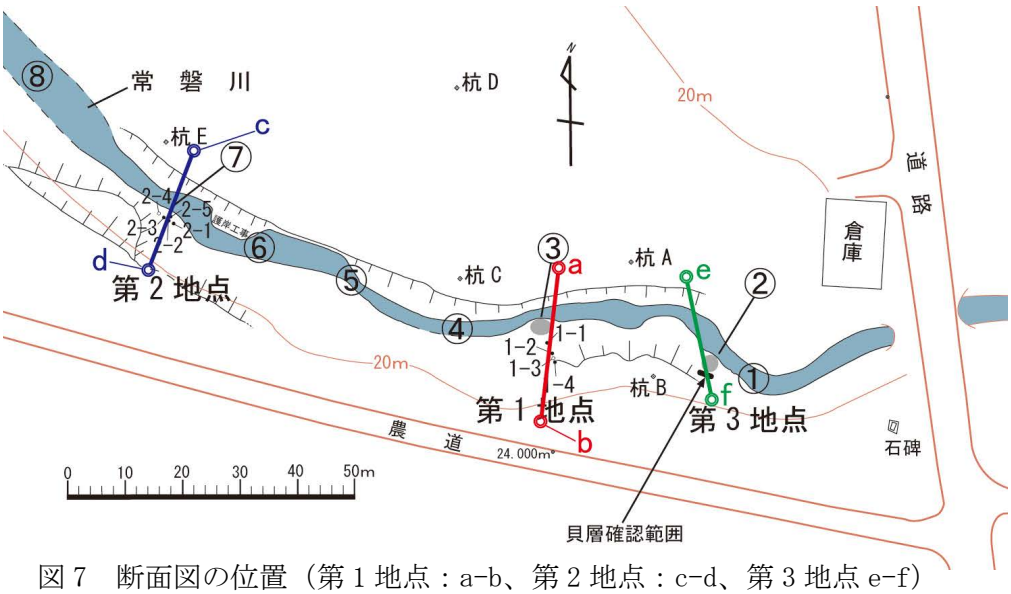

図 7　断面図の位置（第 1 地点：a-b、第 2 地点：c-d、第 3 地点 e-f）

まとめ

本調査の結論として、1949 年に発掘調査された第 1 地点と第 2 地点の貝層（未発掘部分）は残念ながら残っていない可能性が高い。発掘調査からすでに 70

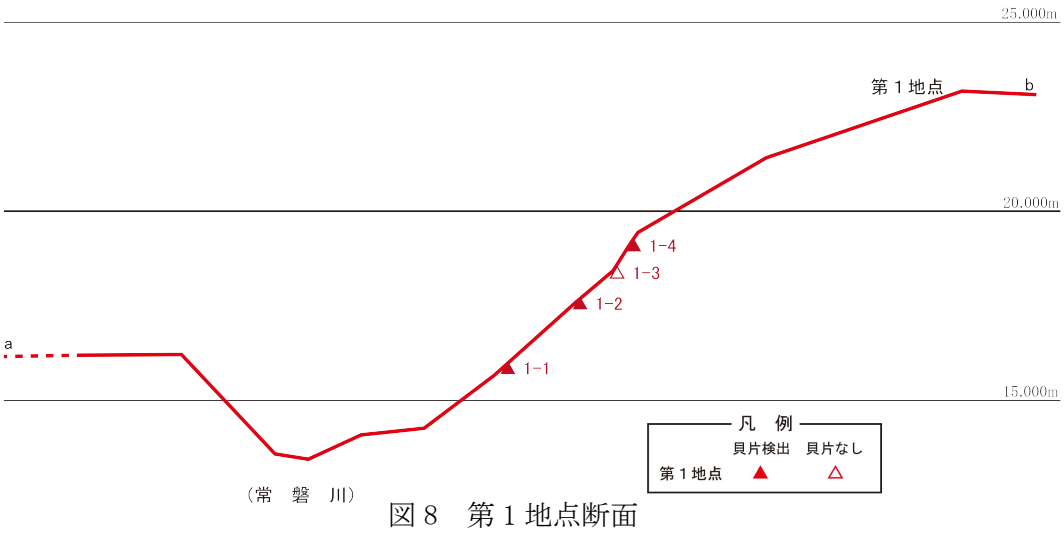

図８　第１地点断面

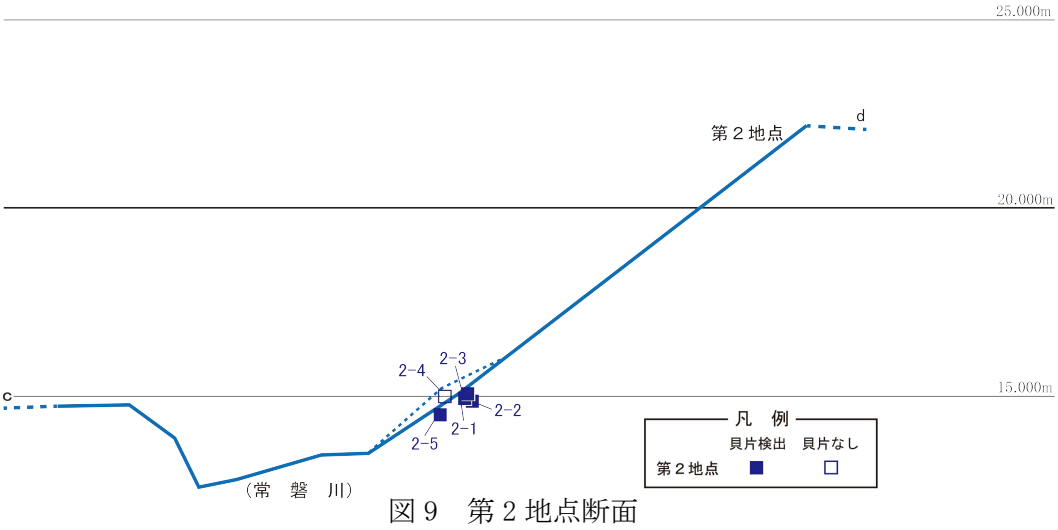

図９　第２地点断面

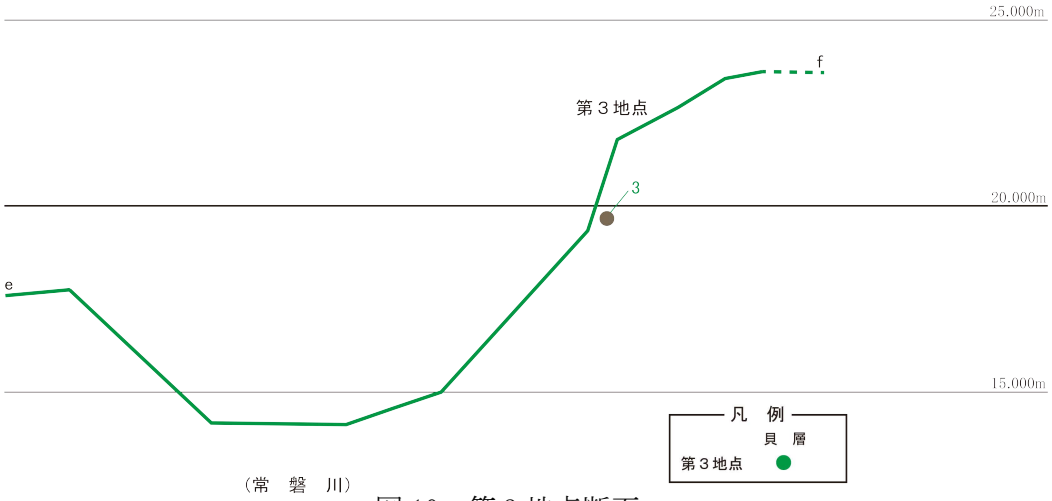

図 10　第３地点断面

年近い年月が経過しており、おそらく崩落・消失してしまったと思われる。一方、本調査では新たに第 3 地点の貝層を発見することができた。

この第 3 地点の貝層は現段階では存在を確認できただけであるが、少なくともアサリ・ハマグリ・シオフキが含まれていることは明らかである。現在では宮城県以南に生息するシオフキの存在から、貝類の採集は現在よりも暖かな砂泥性の海で行われたと考えられる。いずれ発掘調査によりその内容が明らかになれば、円筒土器文化圏の中でも北海道南部−特に津軽海峡沿岸地域における生業や環境復元のための重要な情報源となるであろう。

しかし、当遺跡の北縁部は全体に崩落がかなり進んでおり、第 3 地点の貝層は分布範囲もそれほど大きくないので、崩落してなくなってしまうのも時間の問題であろう。一日も早い本格的な調査が強くのぞまれる。

＜引用文献＞

児玉作左衛門・大場利夫・竹内収太 1958『サイベ沢遺跡』市立函館博物館

地点①の石器

地点②の土器・石器

地点②（貝層の直下）の土器

地点③の土器・石器

地点④の土器・石器

地点⑤の土器・石器

地点⑥の土器・石器

写真 4-1　地点①～⑫で採集された土器・石器

地点⑦の土器・石器

地点⑩の土器

地点⑪の土器

地点⑧の土器

地点⑫の土器

地点⑨の土器・石器

写真 4-2　地点①～⑫で採集された土器・石器